

『子どもの貧困と子育て支援

～細部に宿る人権を護り、育てる～』

社会福祉法人 石井記念愛染園 わかくさ保育園

NPO 法人 子育て運動えん

西野 伸一 さん



人権保育専門講座5では、わかす保育園の西野伸一さんに「子どもの貧困と子育て支援～細部に宿る人権を護り、育てる～」と題して、伊勢・四日市・尾鷲の3会場でご講演いただき57人の参加がありました。

わかす保育園は、大阪市西成区の釜ヶ崎と呼ばれる地域にあります。貧困が深刻な課題である地域の中で、子どもや保護者がどのような生きづらさを抱えさせられているかということや、だからこそどんな取組を大切にしているかについて、詳しくお話しいただきました。

●日本最大の日雇い労働者のまち“釜ヶ崎(あいりん地区)にある保育園”

(1) “釜ヶ崎”に集まる日雇い労働者

わかす保育園は、大阪市西成区の釜ヶ崎と呼ばれる地域にあります。保育園は1970年に誕生しました。その当時、不就学の子どもたちが狭いまちのなかで約300人いました。その中には住民票や国籍がない子どもがいました。“子どもの権利を守る”ために、大阪市の要請でわかす保育園が誕生しました。

当時は、高度経済成長期の真ただ中で、たくさんの建設労働者が必要でした。国は政策として労働力を釜ヶ崎に集中させたので、現在の町の人口の約9割が男性です。景気が良い間はたくさん仕事があつて、ここで働いている人たちは生活面での自由度が高かったのですが、景気が悪くなると、経済の調整弁として扱われ、失業していきました。現在では5000人の労働者が日雇いの仕事に就いています。1990年代からホームレスの問題が起きました。現在もたくさんの方が路上での生活を余儀なくされています。画一的な価値観や競争が格差や貧困を生じさせ、多くの人々が排除、疎外されていきました。

(2) “釜ヶ崎”の暮らし

このまちには菘之茶屋小学校がりましたが、その小学校は2016年に閉校になりました。地域住民は小学校がなくなることで「子どもたちの声がこのまちから消えるのではないか」という不安を感じていました。私たちはこの釜ヶ崎で保育をし、子どもたちが笑顔になれるまちをつくろうと考えています。そのためには、子どもを中心としたまちづくりをしなくてはならないと考えています。保育園は、単に狭い意味の保育という役割ではなくて、まちづくりとLife（人生）にかかわる大切な仕事としての役割が求められていると考えています。

西成区は3つの差別をかかえています。1つめは釜ヶ崎に対する差別です。2つめは、北西部にある西日本最大の被差別部落に対する部落差別です。3つめは、在日コリアンの方に対する差別です。この3つの差別をなくしていくまちづくりを子どもたちと一緒に進めており、差別を克服していくのがわかす保育園の使命だと思っています。

(3) おっちゃんとのかかわりのなかで見えてきたもの

三角公園（萩之茶屋南公園）という有名な公園があります。この三角公園では、ブルーシートで生活をされている人がいて、子どもが遊べる場所がありません。「公園にいる人は怖い人」と思っている地区外の子どもたちがいたので、子どもにおっちゃんのことを知ってもらおうと一緒に遊べる取組がおこなわれ、今も続いています。遊び終わった子どもからは「おっちゃん怖くなかった」という声が聞かれ、偏見や決めつけが変わっていくのを感じます。変わらないのはおとなです。

小さい頃から顔が見える関係環境をつくり、人権について肌で感じ、考える活動をしていくことが大事だと思っています。



また、冬の日、私が「あ～寒いな」と独り言を言いながらまちを歩いていると、後ろからおっちゃんが「ほんまやな兄ちゃん」と声をかけてくれたことがありました。独り言に対して応えてくれるまちはなかなか無いですね。非常に課題の多いまちですが、ここにくらしているとあたたかい気持ちになることがあります。

(4) 子どもたちを育てていくなかで

1960年代から、子どもたちの生活環境は都市化されてきました。遊び場だった道は車に奪われ、空き地もすべて似通った公園になってきています。子どもたちの世界はおとな化が進み、画一的な価値観や競争が格差や貧困を生じさせています。階層化された社会の中で非効率的なものに対する排除、人間疎外というものを感じています。

子育てをするなかで、昔、地域にはコミュニティルールやお互い様という関係性がありましたが、今は人と人との関係は分断されてきています。そして、「正しさ」ばかりが求められる社会のなかで、子どもや母親がどんどん追い詰められています。

おとながよく口にする言葉は今の社会状況を表しています。次のような言葉です。

「早くいや」「きちんとしやなあかんで」「たくさん勉強しなあかんで」「みんなと同じように」「なぜ効率的にできないのか」「失敗しないように」



これらの言葉は、すべて“モノ”をつくるときに使われる言葉です。工場でモノをつくる時には「早く」「きちんと」「たくさん」「同じものを」「効率的に」「失敗がないように」といった言葉が使われます。子どもを育てていくなかで、モノをつくるときと同じような言葉がけをしてしまうことがあります。



ただ、子育てをするなかで保護者や教育に携わる私たちが、こうした言葉を使わざるを得ない状況に追い込まれているのです。その社会の状況を変えていかなければなりません。

●子どもの貧困と虐待

(1) 子どもの貧困について

「子どもの貧困」は深刻化しています。貧困率は前回調査と比べて2ポイントほど下がりましたが、それでも7人に1人の子どもが貧困の状態にあります。乳幼児期に貧困状態で育った子どもは、以下のような状態になっていきます。

【乳幼児期に貧困状態で育った子ども】

- ① 人と人のつながりを保つのが難しくなる
 - ② 働くことや社会参画ができなくなる
 - ③ 人としての可能性が大きく奪われる
- ※保護者は、安心して子育てができなくなる



「貧困」は虐待やDVといった暴力と表裏一体の関係にあることが見えてきました。7人に1人の子どもが貧困の状態にありますが、1人の問題ではなく、6人も含めた社会全体の問題として考えていくことが大切です。

(2) 虐待について

児童相談所が対応した児童虐待の件数は13万件を超えました。これはあくまで氷山の一角であり、まちなかで一人で苦しんでいる子どもや保護者がたくさんいます。

【虐待に至る原因】

- ① 「子どもに起因する要因」・・・低体重、病気や障がいのある子どもなど
- ② 「親自身の要因」・・・親自身の育児不安、精神疾患、母の被虐待歴など
- ③ 「社会的な要因」・・・核家族化、地域との関係が分断されている家族など

こうした要因によって、親は育児ストレスを抱え、孤独や孤立を感じていきます。どこの家庭にも起こりうる全国的な問題です。虐待は実母からの割合が高く、「誰から見ても正しい母親でなくてはならない」と自分を追い込んでいる人が多くいます。現代の母親の子育て能力が低いわけでは決してありません。それだけ母親が子育てしにくい状況に追い込まれているのです。一人が抱える悩みや不安がその人自身の問題として片づけられてしまいます。そうではなく、社会の問題としてみんなが考える問題です。



●事例から考える

(1) 幸ちゃん親子との出会い

精神疾患をかかえながら子育てをされている親子との出会いと、その親子に教えていただいたこととお話しします。幸ちゃん（仮名）親子とは、幸ちゃんが2歳のときの入園を機に出会いました。ある日泣いている幸ちゃんにお母さんがきつい口調で当たっている場面に出会いました。このことが私たちがお母さんの話を聴かせていただくきっかけとなり、さまざまな学びにつながっていききました。

(2) 虐待とトラウマ

入園して少し経った頃、幸ちゃんは頭部外傷により入院しました。病院は虐待を疑い、幸ちゃんは児童相談所に一時保護になりました。児童相談所に呼ばれた母親は「虐待を認めたらあなたに子どもを返すことができるよ」と言われたように感じました。お母さんは、「私は虐待なんてしていない。誰も私のことを信じてくれない」と思ったそうです。

毎年12月25日が近づいてくると、「無理やり子どもが奪われてしまうのではないか」といった不安から精神状態が不安定になります。幸ちゃんが一時保護になった日がトラウマになっているからです。「誰も頼ることができない」という状況のなかで、お母さんは子育てに行き詰まりを感じていきました。幸ちゃんが泣くと、「自分は虐待母として見られるのではないか」といった極度の不安に苛まれ、どうしていいか分からず子どもを力で抑えるしかなくなりました。その度に自分を責めました。

(3) DID（解離性同一障がい）と母親の被虐待体験

お母さんには一つの症状が表れました。それは DID（解離性同一障がい）という人格障がいの一つです。お母さんのなかには5人の人格が現れます。「これ以上苦痛を味わうと死んでしまう」という状況になると、別の誰かにその苦痛を背負ってもらい生き延びようとしたのです。これは生きていくためのお母さんの手段でした。「私は虐待なんてしていない」というお母さんの言葉は、別の人格になっているので本当に身に覚えがないのです。

疾患の原因は、お母さんの生育歴にありました。お母さんの生きづらさの背景にあるものは、お母さん自身が親から幼少期に受けた壮絶な虐待でした。お母さんは、虐待に耐え続け、高校を中退して家から逃げ出すことができました。そして、たくさんのまちを転々としてきました。問題が起こると違うまちに移りました。「まちのなかでは自分の存在はほぼなかったに等しい」とお母さんは語っています。そのまちで生きられなくなったら、そのまちから姿を消してしまう。存在を消してしまうので、一人が抱える問題が見えない問題とされてしまうのです。



表面に出てくるものには背景があります。その背景を見ていくと、「困った親」ではなくて「困っている親」であることに気がきます。私たちは、問題行動にある背景を見ようとする、知ろうとする感性が求められます。

お母さんの被虐待体験を過去にものにする（回復）ために、私は一つのプログラムを紹介しました。MY TREEペアレンツ・プログラムというものでした。私は「虐待からの回復というのは、幸ちゃんとの関係だけではなく、お母さん自身が幼少期に受けた虐待のトラウマからの回復をするためのプログラムでもあるんですよ」とお母さんに伝えました。すると、お母さんは、「自分の回復にかけてみたい。挑戦してみたい。自分は子どもに手をあげるのはもう嫌だ」とこのプログラムを受け入れてくれました。

(4) 「人格的な交流」と「伴走」

私たちは保育園だけでなく、さまざまな支えがなければ回復につながるできないと考えました。そこで、医療にかかわる専門家も交えたネットワーク、アクショングループをつくりました。母親にも精神科の受診を勧めました。一緒につながるということが重要だと考え、

私たちは病院へ同行しました。

お母さんは、幸ちゃんと「一体化した関係性」のなかで生きてきました。

【一体化した関係性】…親子はそれぞれが独立した別な人格としての存在なのですが、そう捉えることが難しくなった共依存的な状態。

めざしたのは一体化した人間関係を緩めることでした。しんどい人ほど、SOS を出せません。そこで重要となるキーワードが「人格的な交流」と「伴走」です。私たち支援にかかわるものは、この時期に、「親や子どもと向き合うのはもうやめよう」と話し合いました。

「向き合う」のではなく、「隣にいる存在になろう」としました。言い換えれば、共に感じて、共に苦しみ(共感共苦)ということです。アドバイスではなく、「聞いてほしい」「わかってほしい」というお母さんの感情を知りたいと思いました。



(5) 承認

一人ひとりを「承認」していくことが重要です。重要な承認には2つあります。

① 存在承認…『あなたがいてくれる』と存在そのものを認める

※名前を呼んだり、挨拶をしたり、スキンシップをしたりすることが、存在そのものを認めることにつながっていきます。

② 行動承認…事実をそのまま伝える

※散髪した人に、「髪の毛切られたんですね」と事実気づくことの方が大切です。「髪型似合っているね」等、自分の主観的な評価を入れるのではなく、ありのままの姿を承認していくことが大切です。

(6) 回復 (Resilience)

お母さんの精神状態によっては、「今日は一日お母さんを休憩して、いい状態で明日迎えに来てください」と話をして、幸ちゃんを地域にあるファミリーホームに預けることもありました。医療、福祉、保育園が連携をしながら、粘り強くお母さんの回復を図っていきました。

数カ月経ったある日、保育園に迎えに来た時お母さんは、比較的明るい表情になっていました。職員室に立ち寄って話をしていかれるのが日常の光景だったのですが、その日も職員室に入ってみえたので、お母さんの話を聴くことにしました。その際、お母さんが「あの子(幸ちゃん)はいいな。私は幼いころから SOS を出したり、人に助けってもらったりしたことがない。それは負けだと思っていたから。でも、あの子はそれができる。あの子はすごいな」と言われました。母と子の一体化していた関係から、一人ひとりの人格として子どもを見ることができるようになったお母さんの姿がありました。「あなたも一人の人格として大切にされるべき存在なんですよ」というメッセージが伝わった瞬間だと感じ、職員みんなで喜んだことを覚えています。



人はいくつになっても回復していくんです。「人に頼ることがあってもいいのだ」と自分を許していく作業が大切です。私たち支援者は、周りからあたたかく包む存在でありたいです。お母さんは今、「私、誰か人の役に立ちたい」と言っています。

●地域における新たな支え合いの社会を求めて

(1) 地域で支えるネットワーク

西成区には地域で子どもを支える2つのネットワークがあります。1つは「要保護児童対策地域協議会」(以下、要対協)です。要対協は全国に設置されていますが、機能している自治体は非常に少ないです。西成区では、中学校区ごとに要対協のケア会議をおこないます。毎月一人ひとりの子どもたちについて地域の関係者(保育園、小学校、中学校、高校の先生も参加)が集まり丁寧に話がされます。

何か問題が起きたときに早期発見・早期解決をするためのネットワークだけではなく、予防のための視点をもったネットワークが必要ではないかと考え「わが町にしなり子育てネット」(以下、子育てネット)というネットワークをつくりました。虐待をゼロにするためには、子育て・子育て支援がセットになっている必要があります。

(2) 地域社会、地域住民による福祉活動

次に「地域福祉」です。地域福祉とは地域による福祉です。単に地域で行っている福祉活動では「地域福祉」とは呼べないと私は考えています。「in」「for」「with」「by」で考えてみます。

「in」・・・単に地域のなかにある施設、単に地域のなかにある学校なのか

「for」・・・地域のための施設なのか、地域のための学校なのか

「with」・・・地域と共にあるのか

「by」・・・地域自身が福祉活動をつくりだすのかどうか

私は「in」から「for」、「with」から「by」をめざしていくことが地域福祉だと考えています。つまり、「地域社会、地域住民による福祉活動」こそが、「地域福祉」だと考えています。そのため、要対協も地域の人たちと共に進め、発展させていきます。子育てネットの活動も地域住民の方と一緒に進めています。

●参加者の感想

- 保育の中で子どもたちの声を聴くこと(気持ちを尊重すること)はもちろんのこと、人とのかかわりのなかで“向き合うのではなく隣り合う”ことの意味を感じることができました。
- 今勤務している園の地域では、貧困が課題になっています。自分は保護者、子どもにとって安全な存在になれるのだろうか、かかわりきれているのだろうかと自分を見つめ直す機会になりました。
- 様々な家庭があるなかで見落としてしまいがちな細かい相談や問題について向き合って、子ども主体で保育をおこなっていきたいです。
- 母親の気持ちに共感することの大切さと、こちらが決まった言葉をかけて誘導するのではなく、思いを受け止めたうえで、選択してもらったり、決めてもらえるような支援も必要なのだと感じました。
- 共感共苦と言われたように、苦しみも共感でき、安心できるような存在になりたいと思いました。